アリストテレスのピリアー論
——egoismとaltruism検討——

津田　徹
Toru TSUDA

はじめに

アリストテレスのピリアー論は，最近多くの研究書，論文によって様々に論じられている。その主題は，『ニコマコス倫理学』の全体の約五分の一を占め，『エウデモス倫理学』においても同様の割合を占める。周知の如く，アリストテレス倫理学全体において，このピリアー論は各巻と密接に関連し，アレテー論と関わり，さらに彼の幸福観にも関わる重要な問題を含むものである[1)]。Rogersによれば，1970年以前は，アリストテレス倫理学はegoismであり，それ以降においては，アリストテレス倫理学はaltruismであるとされるようになった[2)]。そして，egoism, altruismの捕え方もあまり明確にはされてこなかった。

この問題を取り扱うにあたっては，egoismの解釈とaltruismの解釈の相対立する主張がなされる所以を，まず確認する必要がある。よって，拙稿では，まず，

---

1)Stewart vol. 2 (1892, 262)は，『ニコマコス倫理学』において，ピリアーに与えられたスペースは，アリストテレスの道徳体系に対するその主題の重要性を示すものである，と述べている。

2)Rogers (1994, 291)によれば，1970年以前は，H. Sidgwick, G.C. Field, W.F.R. Hardie, D. J. Allanに代表される，アリストテレス倫理学はegoismであるとする立場が主流であったが，1970年以降，J. Cooper, J. Annas, T. Irwin, R. Krautに代表される，アリストテレス倫理学はaltruismであるとする立場が主流となった。

アリストテレス倫理学がegoismであるとする説と，altruismであるとする説（拙稿においてはKahn説）を確認した上で，それぞれの論の根拠を探る。次に，アリストテレスの『ニコマコス倫理学』において語られる自己概念を取り扱うことを通して，アリストテレス倫理学の文脈にもとづいた彼独自のegoismの原像を浮かび上がらせる[3)]。

I 問題の所在とそれについてのテキストの該当箇所

1 『ニコマコス倫理学』第八巻第二章，および第三章の確認

『ニコマコス倫理学』第八巻第二章，および第三章は，ピリアーの対象とその特徴について述べられている箇所である。ピリアーは，交互的な愛情(*EN* 1156a8)や相互応酬的な行為であることが前提とされている(*EN* 1155b18-19)。

アリストテレスによれば，ピリアーには三つの対象がある。すなわち，善きもの，快適なもの，有用なもののいずれかである。そのうち有用なものとは，「それによって何らかの善あるいは快楽が生ずるところのものである」(*EN* 1155b19-21)から，結局，それ自身目的として愛されるべきものは，善きものと快適なものである。

アリストテレスは，以上の二つを対象とするピリアーのうち，善を対象とするピリアーは善き人々，つまり，アレテーにおいて類似した人々の間において成立する，と述べている。このようなピリアーをアリストテレスは，究極的な性質のピリアーであると考えている (*EN* 1156b7-8)。この場合のピリアーは，「…付帯的なものに即して愛しているのではない。それゆえ，これら善き人々の愛は，彼らが善き人々である限り永続する」(*EN* 1156b10-11) という特徴をもつ。「善き人々は，双方とも無条件な意味において善き人々であるとともに，相手方にとっての善き人々でもある」(*EN* 1156b12-13)。つまり，望ましきピリアーは，愛する人達の類似性によってお互いにアレテーそのものに即して存在しているのである。

有用性と快楽を対象とするピリアーと善を対象とするピリアーの間には，明らかに差異が見られる。その差異が何に基づきピリアーが生じるのかについては，次に『ニコマコス倫理学』第九巻第四章，および第八章において明らかに

[3)]だが，拙稿は，これらのegoism/altruismという問題の枠組みそのものには固執しないものとし，むしろ，これを批判的に吟味する立場であることを断わっておく。

される。

2　『ニコマコス倫理学』第九巻第四章，および第八章の確認

『ニコマコス倫理学』第九巻第四章は，自己愛の分類について，第八章は，自己愛は可能であるのか否かについて述べられている箇所である。

アリストテレスは，ピリアーに関する事柄について，「自分自身に対する関係から由来してきたもののようであるτὰ φιλικὰ ..., ἔοικεν ἐκ τῶν πρὸς ἑαυτὸν ἐληλυθέναι (*EN* 1166a1-2) と述べ，ピリアーが自己愛に由来することを示唆している。この一文から発生する『ニコマコス倫理学』の自己愛の問題は多くの研究者たち[4)]によって取り上げられている。

『ニコマコス倫理学』第九巻第八章において，アリストテレスは，自己愛者を二つに分類している。その箇所を参照すれば，自己と同定されるものを二つに分類することができる[5)]。まず，非難されている意味で自己愛者と言われているのは，財貨や名誉や肉体的快楽における過多を自己に配する如きひとのことである (*EN* 1168b15-17)。事実，多くの人々は，これらのもの欲求し，これらのものを最善なるものとして，躍起になっている (*EN* 1168b17-18)。これが悪しき意味における自己愛者の記述である。この場合の自己愛者の自己は，「欲情」(*EN* 1168b20)，「魂のうちの無ロゴス的な部分」(*EN* 1168b20-21) が考えられている。そしてこれらの自己に基づくピリアーを便宜上egoism A とする。

他のもう一つの自己愛者とは，上記で語られた悪しきひととは対照的に，以下のように語られている。「もし，ひとが，常に，正しい事柄や，節制に属する事柄や，その他アレテーにかなったもろもろの事柄を，他のいかなるひとよりも以上に行うよう努力し，美しきことを常に自分に保持する場合...，誰もこれを自愛的であるとは言わないし，これを非難するひともいないであろう。むしろ，このようなひとこそ自愛的なひとであると考えられなくてはならないので

---

4)彼らのうちの幾人かは，これより論じようとする用語法に問題があることを認識した上で，論じるべきであると指摘している。「英語の'self-love'や'selfish'という用語が，曖昧に使用されているという事実により，理解が困難となっている」(Hardie 1968, 323)，「多くの異なった学説が，egoisticと呼ばれ得るがゆえに，我々の最初の任務は，いくつかの区別を導出しなければならない」(Kraut 1989, 78)

5)アリストテレスが自己を何と同定していたのかは，議論の余地がある。著作の性格上，例えば，倫理学的著作や，心理学的著作などにおいて，共通の定義が得られるというわけではなく，必ずしも一義的に定義できるものではない。

ある」（*EN* 1168b25-29)。この場合の自己愛者の自己とは，「各人が真にそれであると考えられるところのもの(ὅπερ ἕκαστος εἶναι δοκεῖ)」(*EN* 1166a17, *EN* 1166a22)，「（魂の）知性的なるもの(τοῦ διανοητικοῦ)」(*EN* 1166a16-17)，「知性的に認識するもの(τὸ νοοῦν)」(*EN* 1166a22) が挙げられる。これらの自己に基づくピリアーを便宜上，egoism Bとする。

以上がアリストテレスの考える『ニコマコス倫理学』における自己概念である。以上のものに各々基づく自己愛は，「多くの人々が非難的な意味において自愛者と呼んでいる」(*EN* 1168b15)いわゆる利己的なegoism Aと，非難されているそれとは別種の自愛，すなわち，「真の自己愛」とも言うべき egoism B に分類できるのである。

前述した三つを対象とする各々のピリアーのうち，『ニコマコス倫理学』第八巻第二章および第三章で確認した有用性および快楽を対象とするピリアーは，その結果，自己にもたらされる快楽，あるいは有用性を期待し求めて行われるものであるために，それは egoism A に基づくと言うことができる。他方，善を対象とするピリアーは，egoism B に基づくということができる。これ以降の中心的な問題は，善を対象とするピリアーに関わる問題である。善を対象とするピリアーを能動理性に基づくaltruismであるとする立場がある。以下では，この立場を取り上げ，altruismの可能性を検討する。

II Kahnの主張するaltruismの可能性とその検討

さて，善を対象とするピリアーがaltruismであるとする立場をここで紹介しておきたい[6]。ここでは，能動理性を論拠としたaltruismの立場を取り上げることにしたい。

Kahnに代表されるこの立場は，かなり興味深い。この立場は，従来から議論されてきている『デ・アニマ』第三巻における能動理性そのものの問題性を含み，細部にわたり当然検討すべき箇所が多数存在すると考えられるが，本稿を

---

[6]本稿では，Kahnの主張する能動理性を論拠としたaltruismの立場を考察する。だが，各論者の主張するaltruism, disinterestedの立場を各々確認すべき問題点が残っている。例えば，Irwin(1988)のように，altruismをsimple altruismとmetaphysical altruismとに区別しているものの，それらを明確に区別する基準は，曖昧である。また，Annas(1993)のように，egoismとaltruismの枠組みによって，ピリアー論を議論することの限界について触れた上で，self-concernとother-concernという用語法の使用をむしろ好むという，慎重な見解も見られる。

進めるにあたり，必要最小限たる要点を取り上げるとすれば，以下のようになる[7]。

A　人間の真なる自己は，自らのヌースである。
B　あらゆる人間のヌースは，根本的に一つであり，同一である。
C　とりわけ卓越した人々の間における完全な友情は，Bにおいて主張された自己との同一性が感じられる相手との間に成立する関係のことである。したがって，他者の自己と自らの自己と同一のものとして認識するのである。

Kahnは，Bに対する反論を予期しながらも，『デ・アニマ』のヌースの説明と，『ニコマコス倫理学』第十巻の人間の神的な部分としてのヌースの記述から，Bを確認できるとする[8]。そして，「この段階において，自己と他者との間における原理上の区別の崩壊により，egoismとaltruismの対立は崩壊する」と結論づけている[9]。

この立場は，ひとに固有な部分であり，真の自己と想定したヌース，とりわけ，能動理性の性質によって，altruismの可能性を導きだそうとし，大きく『デ・アニマ』第三巻第五章を根拠にするものである[10]。Kahnの立場は，我々が他者との関わりをいかにして可能にするのかをある意味において，見事に説明しているように思われる。

ところが，一般にaltruismとは，ギリシャ思想においては，知られていない[11]ということが言われており，altruismという用語そのものも，十九世紀の造語であることが言われている[12]。従来から二次的文献においてegoismとaltruismという二項対立の図式でピリアー論が捕えられ議論されるのが中心であったが，近

---

[7]Kahn (1981, 35)

[8] Ibid. 35.

[9] Ibid. 39.

[10] 周知の通り，能動理性という用語そのものは，テキストにおいては見られない。

[11]Blackburn(1994, 13), "While altruism is frequently thought to be a cornerstone of Christian ethics, as a category it is unknown in Greek thought."

[12]Onions(1996, 13)によれば，この用語は，実証主義的社会学者A. Comteによって1830年に使用された造語である。

代的側面を有するaltruismをピリアー論の議論に持ち込むことは混乱を招く恐れがあるといえるだろう。

以上のように，用語的側面からaltruismには，問題を含むものであるといえるであろう。さらに，Kahnの主張する能動理性を論拠とする説に対しては，有徳な人々の間における他者への愛の可能性を主張するものであるとしても，それは可能性にとどまるものであり，以下のような，いくつかの考察の余地を残す結果となる。

まず，Kahnの主張する説の積極的論拠となる，先の要約Bについて疑問が残る。

この要約Bは，能動理性を論拠とする説にとっては，自己と他者との関わりを論拠づける要点となっている。要約Bにおいて述べられているヌースは，一つであり，同じであるという理由から，能動理性を示していると考えられる。だが，この能動理性によって，他者との関係を論拠づけようとするならば，卓越した人々以外の間における善を対象としたピリアーが可能になる。

しかも，能動理性のみを論拠とすることによって，他者への関係が継続したまま，例えば，年齢や道徳的条件に関係なく，絶えず他者への関係が可能となることになろう。

さらに，Kahnの立場は，以下のことに従えば，『ニコマコス倫理学』第九巻第十章において，友の数について論じられている内容，すなわち，「友人の数についても，…やはり一定の限界」(*EN* 1170b33) があって，「…自己を多数の人々との間に分割することは不可能であることは明白である。」(*EN* 1171a2-4) と言ったことを合理的に説明できない。つまり，アリストテレスがKahnのように考えているとすれば，この言説は，矛盾を来すことになる。このことは，Kahnの立場にとって，最大の難点である。

また，Kahnの立場は，教育[13]の介在を許さない。なぜなら，この説は，万人が能動理性を有するが故に，恒常的に，他者への関係を持ち続けることを必要とするからである。しかし，このことはナンセンスである。能動理性を有していることが，即，他者への関係を何らの労を介せずに可能とするからである。確かに，この能動理性を保有していることが，逆に教育の可能性の根拠となりうるという主張が有り得るかもしれない。だが，教育の可能性は，欠如的な自

---

[13]アリストテレスは，『ニコマコス倫理学』および『政治学』という実践学的文脈において，理想的人間像を構想しているのであり，その実現の手段の一つとして，教育を考えていたことは両著作から明らかである。

己，後天的な自己を前提とするから，当初から他者への関係を有するひとに対しては，教育そのものの介在を許さない。また，Kahnの主張が能動理性によって，他者との関係を根拠づけようとする限り，このことによってひとりひとりの個性が，どのように説明できるのかが疑問である。そして，Kahnの立場に従えば，ひとに固有な自己性が完成されなくてもよいといった極論を容認してしまうことになろう[14)]。

確かに，Kahnは，究極的なピリアーにおいて，「自己と他者との原理上の区別の崩壊により，egoismとaltruismの対立は崩壊する」と主張しているものの，能動理性のみによって他者への関係性をもつという論拠を有する限り，以上に挙げた点を問題として残す結果となる。よって，Kahnの主張するaltruismは，アリストテレスの『ニコマコス倫理学』と『政治学』の実践学的な文脈をある意味において見落としているということが言えるであろう。

以上において，Kahnの主張するaltruismの可能性とその限界について触れてきたが，彼のaltruismに取って代わる説明が拙稿ではどのようになされるべきかについて，以下では，egoismの再検討をし，ピリアー論の基本的構造を確認したい。

III egoismの再検討

以上の考察から，Kahnの主張する能動理性を論拠としたaltruismの可能性は，再考されなければならないであろう。だが，善を対象とするピリアーがegoism Bの場合，どのようなことを意味しているのかを検討する余地がある。このegoismBを支持する論者として，Ross，Homiak，Dziob，Politisらが挙げられる。これらの立場は，self-loveに基づく主体の在り方に着目し，主体のアレテーに依拠することによって他者へのピリアーが可能であるという点において概ね共通している。以上の問題へのアプローチとして，主体のアレテーの観点から，egoism Bに基づく自己の在り方について考えてみたい。

まず，egoism B の立場として，先の節で考察してきたKahnの残した問題から

[14)]altruismを批判するその他の理由については，Rogers(1994, 293)を参照せよ。Rogersによれば，altruismを非難する理由の一つとして，本質的な愛が，生得的にaltruisticならば，我々は自己をaltruisticに愛するべきであるが，これはナンセンスである，と主張する。Cf. Irwin(1988, 614): In Kahn's view, [1981a], 34-40, the 'self' that is involved is the *nous* shared by all human beings. This view makes it hard to see how a distinct individual (....), as opposed to some feature that all human individuals share, could be the object of love.

由来し浮上してきた，自己を何と同定するのかということが考えられなければならないように思われる。つまり，Kahn説においては，能動理性を自己と同定することによって，他者への関係性を主張する立場であったのに対し，このegoism B の立場は，自己を何と同定することによって，他者への関係性を積極的に主張することができるのかが問題となる。このことは，もちろん，Kahnの主張する説とegoism Bとの相違点になるものである。

確かに，egoism B を構成する自己は，テキストから確認できた。しかし，egoism B を構成する諸々のもの，すなわち，「各人が真にそれであると考えられるところのもの」（*EN* 1166a16-17），「知性的に認識するもの」（*EN* 1166a22）について，アリストテレスはそういった各々のものが自己であるかのような曖昧な仕方においてしか言及しておらず，Kahnのように，特定の一つを自己とは同定していない。例えば，egoism Bを構成するもののうちの一つであるτὸ νοοῦνの意味するところは，明らかではなく，能動理性を含まないとはテキストから明らかではない。そして，このτὸ νοοῦνのみを自己と同定した上で，他者への関係性の論拠とする限り，部分的にKahn説を支持することも可能である。しかし，テキストからは，τὸ νοοῦνを能動理性のみと同定することはできないのであり，アリストテレスは，自己を，τὸ νοοῦνだけであるとは述べておらず，先に挙げた複数のものと同定しているのである。この事態を慎重に取り扱うとすれば，他者への関係性を共有するためには，能動理性以外のものを必要しているということが主張できる。

アリストテレスが，テキストにおいて，身体性を持つ自己について度々触れていることは，彼の形而上学的，心理学的著作[15]から明らかであり，実践学著作[16]からもその側面を伺い知ることができる。つまり，アリストテレスの想定する，有徳なひとが，如何にして他者との関係性を有するようになるのかという問題は，能動理性のみを依拠とするということではなく，自己存在という在り方に視点が置かれ，それに依拠する構造に存在している。この点が，Kahnの立場と拙稿との違いである。

アリストテレスは，先に挙げた egoism B を構成する諸部分について触れた後に，「自己の存在することが望ましくあるのは，自己が善き人間であることの知覚にもとづいていたためであり…」（*EN* 1170b8-10）と述べ，自己認知的な知覚部分の重要性を指摘している(Cf. *EN* 1170a25 sqq.)。そして，さらに，

---

15) Cf. *Metaph*. 1037a26, σύνολον; *DA*..412a16 συνθέτη.

16) *Pol*. 1332a32 sqq.

> 幸福なひとにあっては，自己の存在しているということが――それは本性的な善であり，快であるが故に――それ自体望ましいことならば，そして友の 存在することも彼（自己）にとってこれとほとんど同様であるとするならば，友もまた望ましいものに属するものでなくてはならない。だが，彼（自己）にとって望ましくあるところのものは，彼（自己）において現存していることが必要であり，そうでなければ，彼（自己）は，その点において欠けるところがあることとなろう。（*EN* 1170b14-18)

と述べ，「自己が存在すること（τὸ εἶναι)」の重要性を説いている。つまり，アリストテレスは，善を対象とするピリアーの成立根拠について，Kahnの主張するように，単一的な部分（能動理性）に依拠せずに，「自己が存在すること」という諸部分の調和的，統一的な自己を想定し，それに依拠することによって，他者（友）との共有を説こうとしているのである。

Kahnの主張するaltruismは，善を対象とした他者への愛の根拠として，自己と同定された能動理性に基づく限り，愛するという能動性を一切否定しており，以上のテキストにおいて述べられている広義の意味における「自己存在」を認めていない点が挙げられる。そして，Kahnの説は，他者との関係性を持つために，「自己が存在すること」と，それを可能にする主体性のアレテーが言及されていない点を含んでいるように思われる。この「自己が存在すること」とは，『ニコマコス倫理学』第八巻，第九巻の文脈によれば，単に（生きている）自己が存在しているという場合の意味ではなく，もちろん，有徳なひととして存在することを意味する。

実際，アリストテレスは，『ニコマコス倫理学』第八巻第一章において，「なぜなら，それ（ピリアー）は，一つのアレテーか，もしくはアレテーと切り離せないものだからであり，さらに，我々の生活に対して何よりも必要なものである。」（*EN* 1155a3-4) と述べ，ピリアーとアレテーとの関係を示している。そもそも，アリストテレスは，『ニコマコス倫理学』において，第一巻冒頭からひとのエートスの在り方をめぐって，さまざまに検討してきた。例えば，『ニコマコス倫理学』において，第一巻第七章における，ergon argument においては，ひとに特有な機能について議論され，プシューケーの「ロゴスを有する部分 」の働きの重要性が指摘されてきた(*EN* 1098a4-5)。そして，ピリアー論のテキストにおいては，「彼（正しい事柄とか，節制に属する事柄とか，その他およそアレテーに即したもろもろの事柄を他の如何なるひとよりも以上に行う

ことを努めているようなひと）（Cf. *EN* 1168a34-36)は，最も麗しきもの，最高の意味における善きものを自己に配し，自己の内なる最も優位的なものを満足せしめ，あらゆる事柄について，このものの示すところに服従する（*EN* 1168b29-31)」，「…善きひとは，明らかに自己に対して麗しさを何人に対してよりも多く配している（*EN* 1169a34-36)」といった規範的記述が見られる。善を対象とするピリアーを可能とするひとのアレテーに，アリストテレスは言及しているのである。なぜなら，自己を可能な限り愛することのできるひととは，悪しき人々のように，自分自身と仲違いしているひとや欲情や願望とがそれぞれ赴くところを異にすること(Cf. *EN* 1166b7-8)を意味するのではなく，「自分にとっての善き事柄，ないしはそう見られるところの事柄を願いかつ行う…（*EN* 1166a14-16)」ひとのことを意味するからである。このことは，善を対象とするピリアーが，egoism　Bに基づくことに優先権を与えることを意味している。このことを可能にする主体としての自己のことを，アリストテレスの主張する「自己が存在すること」と考えてよいかもしれないが，善を対象とするピリアーが，このような自己に基づくことによって，他者への配慮・関係が可能となることを示している。もちろん，アリストテレスが究極的なピリアーのことを，通俗的に解釈されるような，非難的な意味合いにおいて理解されている　egoism A ではなく，非難されることのない egoism B と想定していたことは明らかなことであり，この場合のエゴイズム（自己を愛する）というニュアンスは，欲情や，パトスによって，結果として快楽，有用性を目的とすることのないような，善きことのために労を惜しまない（*EN* 1166a15-16)，自己への配慮のことであると考えられる。Allanも「self-interestはあらゆる行為と選択の動機と考えられる」としている[17]。このことが『ニコマコス倫理学』第九巻第八章において，我々は誰よりも自己を愛するべきであるか否か，という問題に対する解答として考えられるのであって，当然，その箇所においても触れられていたように，大衆が考えている，いわゆる通俗的な意味合いであるピラウトンとは，区別した上で，ピラウトンを理解しなければならないのである（*EN* 1169a35-b2)。

この「自己が存在すること」に基づくことを前提とすることによって，他者への愛が始めて可能となるのであり，友である他者を選択し友に対して行為を行う，もろもろのピリアーに関する事柄は，「自己が存在すること」に基づく。そして，もし，善きひとが他者のために死ぬならば，彼は失うものよりもより

---

17) Allan (1970, 140).

多くのカロンを手に入れるのである[18]。

このようにしてみてくると，善を対象とするピリアーとは，「自己が存在する」ことに基づくことを意味し，これを自己愛として解釈することに疑問の余地はないように思われる。アリストテレスは，テキストにおいて，自己の順境は，進んで友を呼ぶべきであり，逆境においては，それを遠慮すべきであると考えられる(Cf. *EN* 1171b15-17)と述べ，その理由を，善を施そうとするのは，麗しいことであり，逆に，悪を分与することはできるだけ避けるべきであると述べており，明らかに主体としての自己のアレテーに言及し，他者問題も自己問題から由来することを述べているからである。

IV egoismおよびaltruism構造の超越にむけて

この時点において，二つの問題が生じている。一つの問題点は，自己という主体確立としてアリストテレスが語ろうとしている内実は，どのようなものであるのか，ということである。他のもう一つの問題点は，善を対象とするピリアーの理論的根拠が二つ考えられ，altruismを主張するKahn説はいくつかの疑問の余地を残す結果となったが，Kahn説以外の，例えば，disinterested解釈とegoism B とは，果たして，全く異なった論拠でもって各自の説を主張しているといえるだろうかということが挙げられる。つまり，disinterested解釈と，egoism B とは，他者との関係性を有するという肝心の点において，各論拠がある意味において重複しているのではないかという疑問が挙げられる。

前者の問題についての解決の方向性は，以下のように考えられる。アリストテレスは，「アレテーと立派なひとがもろもろの基準である」(*EN* 1166a12-13)と述べ，このことは主体としての自己のアレテーが教育において重要な問題となることを示している。アレテーの獲得については，ピュシス（自然），エトス（習慣），ロゴス（理性）の三要素の調和的発達が期されなければならないことが『政治学』第七巻以降において述べられている。この箇所は，理想的人間像としての有徳なひとが目標として掲げられ，教育がどのようになされるべきなのかをめぐって述べられていることは，周知の通りであるが，この実践学的文脈に基づいた広い意味での教育の習得の程度に応じて，善を対象とするピリアーは，そのひとにとって可能な限り拡張することにより，他者をも自己の一部として包括することを可能とする。当然，この点においては同一の状況に

---

[18] Cf. Ross (1995,237)および*EN* 1168a28-1169b2.

おいてでさえ，個人差が存在すると考えられるが，このことは，自己をどの程度愛しているのかという程度の差異と考えられる。アリストテレスの幸福論と関連していえば，自己の他者へともたらす幸福が，直接自己の幸福として，彼自身の関心を可能にする。ここに egoism B に基づく他者への愛が，同時に自己への愛に基づくことの可能性が示される。なぜなら，今や他者は彼にとって「第二の自己」だからである。

> 自己の内なる最も優位的なものを愛し，これを満足せしめるところのひとこそ，また最も自己愛的なひとでなくてはならない。
>
> καὶ φίλαυτος δὴ μάλιστα ὁ τοῦτο ἀγαπῶν καὶ τούτῳ χαριζόμενος.
>
> *EN* 1168b33-34

だが，後者の問題点の方が，最近のピリアー論解釈をめぐって，より丁寧に扱われるべき問題である。

egoism B の立場は，アリストテレスが問題群として自己を捕えている点にピリアー論上の解釈の不明瞭さを残すものの，他者との共有や関係性を主張するのに，また，個別かつ普遍的存在であるひとを説明するのに何ら不都合は存在しない。disinterestedの立場は，有用性や快楽を私心に配することなき主張のことであるが，仮にこの主張をアリストテレス倫理学に採用するとしても，検討の余地を残す。つまり，この立場は，自己に有用性や快楽を配しないとは何に基づきそのように主張できるのかということを含意するものではない。むしろ，egoism B は，この事態をよく説明しうるのである。真なる自己への配慮に基づき，このことによって他者への拡張が可能となる。そして，この点において教育の必要性が主張されるのである。

アリストテレスは，ピリアー論において，自己という問題を実践学的文脈から体系化している。そして，このピリアー論を取り扱う時，egoismとaltruismの二項対立の構造を，拙稿では議論の便宜上使用したが，一度放棄される必要があり，テキストにおける自己をより対象化し，問題化する必要があるように思われる。この点については，今後の課題としたい。

（京都大学・西洋古代哲学史・修士課程）

参照文献

Allan, D. J. *The Philosophy of Aristotle*. Oxford. 1970.

Annas, Julia. *The Morality of Hapiness*. Oxford. 1993.

Blackburn, Simon. *The Oxford Dictionary of Philosophy*. Oxford. 1994.

Burnet, John. *Aristotle on Education*. Oxford. 1903.

Burnet, John. *The Ethics of Aristotle*. London. 1900.

Bywater, I. *ARISTOTELIS ETHICA NICHOACHEA*. Oxford.1894.

Dziob, Anne Marie. "Aristotelian Friendship: Self-love and Morality Rivalry." *RM* 46. 1993. pp.781-802.

Guthrie, W.K.C. *A History of Greek philosophy. VI Aristotle*. Cambridge UP, 1981.

Hardie, W.F. R. *Aristotle's Ethical Theory*. Oxford. 1968.

Hicks, R. D. *Aristoteles De Anima*. Cambridge UP. 1907.

Homiak, Marcial L. "Virtue and self-love in Aristotle's Ethics." *CJP*. 6 (4), (1981). pp. 633-651.

Irwin, T. *Aristotle's First Principles*. Oxford. 1988.

Jaegar, W. *ARISTOTELIS METAPHYSICA*. Oxford. 1957.

Kahn, Charles H. "Aristotle and Altruism." *Mind* 90 (1981). pp.20-40.

Kraut, Richard. *Aristotle on the Human good*. Princeton UP. 1989.

Newman, W. L. *The Politics of Aristotle*. 4 vols. Oxford. 1902.

Onions, T. *The Oxford Dictionary of English Etymology*. Oxford. 1966.

Politis, Vasilis. "The Primacy of Self-love in the Nichomachean Ethics."*OSAP*. 11 (1993). pp. 153-174.

Rogers, Kelly. "Aristotle on loving another for his own sake." *P*. 39(4). 1994.

Ross, W.D. *ARISTOTLE. with a new introduction by J. L. Ackrill*. Routledge . 1995.

Ross, W.D. *ARISTOTELIS POLITICA*. Oxford. 1957.

Stern-Gillet Suzanne. *Aristotle's philosophy of Friendship*. SUNY. 1995.

高田三郎（訳）『アリストテレス　ニコマコス倫理学』，岩波文庫。

Verbeke, G. *Moral Education in Aristotle*. CUP. 1990.